藤丸地獄変　異聞譚

子の月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
藤丸地獄変　異聞譚

【Ｎコード】
Ｎ００３６Ｒ

【作者名】
子の月

【あらすじ】
似非戦国時代に転生してしまった主人公千雪。そこははるか昔にやったゲームの世界だった？どうあがいてもハッピーエンドが無いこの世界（ゲーム）でいかに目立たぬように死なぬように、生きていくかを模索する主人公の物語です。

はじまりは　ブラックアウト

久しぶりに実家に帰り、かつての自分の部屋が物置になっているのを見た。

まあ、そんなものかなと思いながら、色々押し込んである本棚に適当な本が無(ひまつぶし)いかと漁っていたらはるか昔の攻略本たちが出てきた。

めぼしい本はどうやら兄弟達に持っていかれたらしい。

気に入って持って行ったか、売り飛ばされたか。

まあ、長い事放置していたんだから、文句は言うまい。

その中で目に留まった攻略本。

ああ、コレ懐かしいなーと思いしばらく眺めていたら、意識が遠のきブラックアウトした。

はじめまして　あかちゃん

真っ暗な中、目を開けても真っ暗だった。

何だか凄く窮屈な場所に押し込められているようだけど、兄弟達の悪戯？

それにしては悪趣味にぶよぶよした場所で若干気持ち悪い。

水よりも何だかどろっとしたモノの中に居るようだけど体がうまく動かない。

不思議と呼吸できているのか息苦しくはない。

目が慣れてきたのであたりを見回して「ぎゃー！！」

叫びたくても叫べない。

何故か？

・・・声帯がまだ出来上がっていないから。

私は胎児の夢でも見ているらしい。

うん、早く目が覚めないかな？

「あら、動きましたわ」

「本当に活発なお子のようですね」

羊水の所為でよくは聞こえないが、私のことを言っているらしい。

うっすらと聞こえるその声は生前の父母とは違うようだ。

そんな感じの夢でも見てるのかな？

夢なら覚めて！！（切実）

そんなことを思いながら胎児ライフを送っていたんだけど、そんな日々も唐突に終わる。

なんか、ぐぬぬぬぬって感じで押し出されています。

痛いです。痛いです。痛いってば！！

なんかとりあえず生命の危機を感じるくらいの痛みの中、必死で押し出される方に這い出ました。

・・・マジで死ぬかと思いました。

お産って母親だけじゃなく、子供も痛いものでした。

夢の癖に痛いだなんて！！

ぼやけた視界で見ると母親らしき人が抱きとめてくれました。

「よくやったぞ。藤」

「はい、おやかた様」

・・・そう言って微笑みあう二人は親子ほど年が離れていました。

なんか着物着ています。

私を抱きながら二人でなんか桃色世界を作っています。

周りでは忙しく働いている人たちがいるにも拘らずです。

いろいろ突っ込みたいけど限界です。眠いです。

こんにちは　弟

いろいろ羞恥プレイはありましたが、なんとか乗り切りました。

授乳とかオムツとかそういうヤツですね。

・・・深く聞かないでください。

人は羞恥心では死ねない事を学んだんです。

根性で歩けるようになって無事どちらも卒業しました。

2歳になり、行動範囲も広がり、拙いながらもしゃべれるようになりました。

いろいろ情報を仕入れた結果、ここが戦国時代であることがわかりました。

しかし、自分の父親が一体何者なのかがわからない。

戦国時代って皆ころころ名前変えてたし、似た名前なんて山ほどあったし・・・

何よりもここは別邸らしく、全く寄り付かないってのが一番だよね。

そんなめったに寄り付かないくせにやることはやってるらしく、弟が生まれました。

なんか弟を抱いてイチャコラしてますが、私が生まれた時もこんなんだったのか？と半目で見てしまいました。

千雪について　父の考察

正室の侍女、藤が女の子を産んだ。

その子は周囲のもの曰く、怖ろしく発達が早いらしい。

夜泣きはほとんどせず、授乳も早々と卒乳し、オムツに至っては根性で取ってしまったそうである。

やっと歩き出した子供が這ってでも厠へ行こうとするその姿は『根性』でとしか言いようが無いと語った。

しかもたどたどしい話し方ながらも周囲の者達に自身の状況やさまざまな事を聞いて回っているらしい。

そして、それを正確に理解しているらしい。

「おやかたさまには、なんにん、おさあさまのようなひとがいるの

？」

そう聞かれた者はなんと答えて言いかわからず笑ってごまかしたそうだ。

やはり、血がなせる業かとんでもない子供が生まれてしまったようだ。

しかし、藤とは相性がいいのか、二人目も生まれしかもその子は男の子だった。

許されるなら、このままゆるりと時が流れ、皆で暮らしたいものよ。

たぶん　よくある名前

忘れていたが、私の名前は千雪というらしい。

何でも私が産まれた日はとんでもないくらいの大雪が降り、本邸にいたおやかた様が辿り付けずに本当にギリギリで産まれた直後に来れたということからついたそうだ。

父様（おやかた）の部下の人たちは雪が降るたびにあの時は大変だったと言っている。

そして、問題なのは弟の名前である。

それは『藤丸』。

私が転生前に呼んでいた攻略本の主人公と同名だったりする。

『藤丸地獄変』

苦労して攻略してもせっかく生き残ってもバッドエンドもどきにしかならないあのゲームである。

しかし、藤丸ってのは意外にいろんな人の幼名に使われていたし、そんなに気にするほどの事でもないよね？

いくら死ぬ前に見ていたからって、そのゲームに転生しましたなんてそんなバカな事が・・・

あるわけ無いよね？！

さようなら　おかあさま

今、母が死に掛けています。

もともと医療なんてものが存在しない戦国時代。

あっけなく人は病気にかかり、あっという間に死んでしまいます。

風邪薬、抗生剤、栄養剤そんなものが全く無いこの時代。

知っていてもどんなもので出来ているなんて知らない私。

全く役に立ちません。

母の病気はおそらく肺炎です。

風邪をこじらせて、本当にあっという間でした。

皆、母をなんとか治そうとがんばってくれています。

侍女さんたちやお医者さん、おやかた様もいます。

私のできる事といったら、邪魔にならないように弟と大人しくしていることくらいです。

・・・母の苦しそうな呼吸が聞こえなくなりました。

周りの大人達は帰っていきます。

私も外へ出るよう言われました。

「いやぁぁぁ」

確かにこの人はこの世界で私の母だったのです。

恥ずかしさが前に出て素直に甘えられませんでしたが、確かに私のお母さんでした。

私は母の遺体にすがってなき続けました。

つられたのか弟も泣いています。

そうして、私達は泣きつかれて眠るまで、母と一緒にいました。

状況を確認します。

おかあさまが死んでわかったことがありました。

どうやら私はとても特殊な立場におかれているようです。

父親である”おやかた様”にはたくさんの”おくさん”がいるそうなのですが、

彼女達は皆身分のそれなりにある人ばかりだそうです。

私の母のように何処かの孤児を正室様が拾ってきたという怪しげな者は当然居ないわけです。

随分本邸から離れているし、人の出入りも最小限だとは思っていましたが、大人の事情だったのですね。

愛妾の母がいなくなって私達の扱いがどうなるのか、かなり心配です。

そんな未来の心配よりも目の前にある懸念事項のようです。

枯れ木に強引に極彩色の布を巻きつけて案山子をつくったのか？

目らしきものと口らしきものが見て取れるがこれはどう見ても・・・

「妖怪枯れ木ジジイ？」

「誰が枯れ木じゃ」

意外に鋭い突っ込みでした。

状況を確認します。その２

妖怪枯れ木ジジイは『地獄極楽』という名前らしい。

・・・原作キャラです。実際に見るとかなり強烈ないでたちです。

メッチャ目立ってます。忍者のはずなのに忍んでないです。

ここまではっきりと見せ付けられると認めるしかないようです。

ここが『藤丸地獄変』というゲームの世界であるということを。

違っているのを切に願っていたんですが、嫌な予感ほどよく当たるものです。

ところでこの妖怪(ひと)、確か長老的立場な人だった筈ですが何しに来たんでしょうか？

・・・勧誘？それとも誘拐？もしくは抹殺？

わざわざこんな派手ないでたちで現れて、離れとはいえ人目もある場所で白昼堂々そんなことはないでしょうが。

情報が少なすぎて判断が出来ません。

「ふぉふぉふぉ、確かに親方様が仰るとおり面白い童じゃな。

心配せずとも『母を亡くし悲しんでおる主らの相手をしてほしい』と言われただけじゃよ」

確かに、母を亡くして悲しんでいた。これからどうなるのだろうと不安だった。

確かにその通りなのだけれど、今、目の前にある不安に比べたら大したこと無いような気がしてきた。

今まで見たくない知りたくないと必死にごまかしてきたけど、ここまで来たら腹を括るしかない。

「・・・連れて行って欲しい場所があります」

状況を確認します。その3

今、妖怪枯れ木ジジイに怒られています。

滅茶苦茶怒られています。

正座させられています。

足が痛いです。

お腹が空きました。

・・・わかりました。確かに無謀でした。

まだ幼子な私が山道を行くのは。

山ってだけでなく、国境(くにざかい)でとても危険な場所のようです。

その上、野生動物たちが襲い掛かってくる事もあるらしいです。

でもね、ここが『藤丸地獄変』の世界だと確かめるには行かなきゃ行けない場所なんですよ。

最初のイベントの地、『獅子王の祠』へ行かなきゃいけない・・・ような気がする。

武田信玄死後、好きにしていいといわれた藤丸（しゅじんこう）に上杉謙信から招待をうけ出発する。

上杉領へ向かう途中にある山道で一行は野生（いぬ）動物の襲撃を受ける。

そのマップ上にある『獅子王の祠』の前に行くと発生するイベント・・・があったはず。

そのイベントを私もしなくちゃいけないような気がするんから、行きたいって言ったんだけど。

・・・怒られてます。大事な事なので3回目です。

ところで、枯れ木ジジイもとい地獄極楽さん。

「私の血が貴重ってどういう意味ですか？」

「・・・・・・・・・・・・さぁて、そんな事言ったかのぅ」

へぇ、随分長い沈黙でしたね。

「そういえば、そろそろ飯の時間じゃのぅ」

千雪姫について　妖怪枯れ木ジジイ（地獄極楽）の初見　その１

ワシ、なんでこんなところで飯なんぞ食っておるんじゃろう？

いや、ボケてない。ボケてなぞおらんぞ。

ボケた振り、死んだ振りで人をからかうのを趣味にしておるが、まだまだ若いもんには負けんわい。

ワシは地獄極楽。武田家に仕える忍者じゃ。

といっても現役は当に引退し、後任指導が主な仕事じゃ。

そんな折、主から娘の様子を見てきてくれるように言われたんじゃ。

愛妾の藤殿が亡くなられ子供達が残された。

その子供、特に娘の様子を見てきて欲しいと頼まれた。

強大な武田家の主とは言ってもアレも人の子、人の親なのじゃろう。

そんなことを思いながら、その娘子に会いに行ったのじゃが。

事もあろうにワシの事を『妖怪枯れ木ジジイ』と言いおった。

まあ、確かに夜見たらそういわれても仕方が無いかも知れんが、今は昼間じゃ！！

それに妖怪を見て怯えるどころか冷静に茶なんぞ出してきおる。

主から聞いてはいたが、年の割りに落着いた変わった童のようじゃな。

しばしワシを見、遠い目をした後、なにやら決意のこもった目で『連れて行って欲しい場所がある』と言ったのじゃ。

ワシはその場所を聞いて顎が外れるくらい驚いた。

どうせ主の所が、せいぜいこの周辺を歩いてみたいと言う事かと思ったら、なんと国堺（くにざかい）に行ってみたいらしいのじゃ。

しかも昨年戦ったばかりで決着の付いておらん上杉と武田の境界線だという。

本人はそこがどのような所かわかっていっている風はない。

漠然と、あっちの方のこういう地形の場所という風に言っておる。

何でもその場所が呼んでおるような気がするらしい。

ワシは怒った。まだ童(こども)である姫にそんなところに行けるわけが無いじゃろうと。

馬にも乗れず、術も使えず、鳥瞰図も使えない、そんな状態では無理じゃと。

山に入れば夜盗や野生動物が襲ってくるかも知れん。犬や猿に食われてしまうぞ！！と。

お主は自分の体に流れる血をなんと思うておる。とても貴重なものなのじゃぞ！！と。

・・・とりあえず、諦めさせる事には成功したようじゃが。

「私の血が貴重ってどういう意味ですが？」

・・・しまったのう。言うてはならん事を言ってしまったようじゃ。

「・・・・・・腹が空いたの、飯でも食うか」

そう言って、さっさと立ち去ろうとしたのじゃが、アヤツ、ワシの腕をしっかり掴んで離さんかった。

「昼の時間はとっくに過ぎました。今行っても碌なものはでないでしょう。

用意してもらいますから一緒に食べましょう」

近くにいた者に昼餉を頼むと、それを待っていたかの様にてきぱきと用意されていく、

恐らくいつ頼まれてもいいように準備しておったのじゃろう。

「皆、ありがとう。さっ、地獄極楽さん。一緒にいただきましょう？」

さっさと暇乞いをしたかったのじゃが、こうも周到に用意されては逃げ場はない。

さらに、用意した侍女達の視線が『姫様の誘いを断ると?･!･』と無言の圧力をかけてくる。

話に聞いていた通り、随分下々の者に慕われておるようじゃ。

そうして、ワシは冒頭に戻る。

「それで、私は正室様の侍女藤の子供で庶子な筈ですが、私の血が貴重とは一体どういうことですか？」

侍女たちを下がらせ、人払いをした後、童（こども）とは思えぬ眼力でこちらを射抜く姫を見ながらワシは思った。

なんでワシ、こんな所にいるんじゃろう。と

状況を確認します。その４

今、妖怪枯れ木ジジイをイジメています（笑）。

どうやら私の体に流れる血には秘密があるようで、さらにそれは極秘事項だったようです。

うっかり口を滑らせてしまったらしく何とか誤魔化そうとしていますが、バレバレです。

弱みゲットです（黒笑）。

それで、どうやってイジメているのかと言いますと・・・。

どんな秘密が隠されているのか非常に気になるところですが、それ以上に気になるモノがあったのでそちらを教えてもらいました。

鳥瞰図とか、術とか・・・ですね。

馬術についてはまだ体が小さいので大きくなってからと言われました（チッ）。

流石、原作でも長老といわれた人ですね。

なかなか素直に教えてくれようとはしませんでした。

「うっ、腰が」とか「ワシもボケてきたかのぅ」などと言って誤魔化そうとします。

話を逸らそうとする度に『血』の話を振ると、仕方ないという風に教えてくれました。

でも何度も脱線するので、なかなか話が進まなくてイライラしました。

何度、枯れ木を燃やしてやろうと思った事か・・・。

鳥瞰図についてはゲームで実物を見ていたので、なんとなく説明を聞いてるうちに出来るようになりました。

驚いた事に、この『妖怪枯れ木ジジイ』鳥瞰図では味方扱いなんですよね。

ゲーム内の鳥瞰図では味方は青、敵は赤、中立はピンクで表記されていた筈。

なので、私と同じ青表記のジジイは味方の筈なんだけど、『此処』でもそうなのかな？

でも、周りに赤（敵）やピンク（中立）がいないから、皆が青（味方）表示しかない。

まだ初心者だから敵味方の区別が出来ないのかな？

まさか、敵かもしれない人に「貴方は味方ですか」なんて聞けるわけないしな。

まあ、これは違う色の表示が出るまで保留にしておこう。

藪をつついて蛇を出したくないしね。

さあて、次は『術』について教えてもらいましょうか？（黒笑）

状況を確認します。その５

妖怪枯れ木ジジイに術のこと聞きましたが、教えてもらえませんでした。

馬術と同じで体が出来上がっていない子供では無理だそうです。

・・・ふ～ん（黒笑）

無言の圧力をかけてたら、術の巻物をくれました。

『せめて字が読めるようになってからにしてください（泣）』だそうです。

なんだか酷くいじめているような気がしましたが、気のせいでしょう。

煤けて白くなっているような気がしますが、気のせいですね。

さて、最後に私の『血』のことを聞かせてもらいましょうか？

状況を確認します。その５（後書き）

かなり間が開いてしまった上に、短くてすいません。

見捨てないでいてくれたら、うれしいです。

千雪姫について　妖怪枯れ木ジジイ（地獄極楽）の初見　その２

鬼がおる。わしの目の前に、鬼がおる。

散々、人を脅して情報を聞き出しておいて、最後まで搾り取ろうとするなど、まさに鬼じゃ。

普通こういうものは、ここまで搾り取ったのだからと、最後の最後は見逃すのが人情じゃろう？

それをこやつは・・・『今を逃したら、二度と聞き出せないような気がするから？』

確かに、その通りじゃが、地の文に突っ込みを入れるな。

なに？・・・『全部声に出している』・・・そうか、それは済まなかった。

しかし、どうしても聞くのか？あまり子供に聞かせられる話ではないのじゃが？

・・・まあよい、いつかは聞かせねばならぬことじゃ、心して聞くがよい。

お主の父、親方様にはたくさんの妻がおるのは知っておるな。

一番初めに妻となって輿入れしてこられたのが、上杉の方なるお人でな、たいそう美しい人であったそうじゃ。

輿入れすぐに身籠られたんじゃが、願い空しくお腹の子共々帰らぬ人となってしまわれたんじゃ。

・・・と言うのが、表向きの話じゃ。本当は上杉の方は無事女の子を産んでおられるんじゃ。

それが、お主の母、お藤の方じゃ。・・・『近親相姦！！』・・・違う！！そうではない。

輿入れしてきた時既に上杉の方のお腹には、かの方のかつての婚約者の忘れ形見が宿っていたのじゃ。

・・・『じゃあ何でその人と一緒にならなかったのか？』・・・それはじゃな。

子供にはわかりにくいかもしれんがな、大人にはいろいろあるんじゃよ。

そう言って、わしは語りだした。かつて聞いた悲しい恋の物語を。

ジジイの昔話は長かった。その1

そろそろ夕餉の時間です。

目の前では妖怪枯れ木ジジイが語ってます。

ええ、そりゃあもう澱みなく語っていますよ。

一体なんのスイッチ押しちゃったんでしょうね？

あんだけ重かった口がどんな潤滑油入れたのか？！ってくらい軽いです。

えっ？昔話の内容ですか？

一言で言えば悲恋話ですね。

昔から決められていた婚約者と幸せに結婚し初夜を迎え、幸せの絶頂にいると思われた主人公。

しかし、その深夜何者かの奇襲にあい婚約者は殺されてしまう。

新郎のとっさの機転と主人公の運が重なり何とか逃げ延びたのは良かったが、

絶望に打ちひしがれる主人公をさらに打ちのめすような真実が！！

なんと賊を使って襲わせたのは主人公の父親と兄だった。

彼等はお家乗っ取り、下克上を企み主人公諸共亡き者にしようと計画したのだった。

もともと婚約者の後見人だった父親だからか問題なくお家乗っ取り、下克上は成功した。

そして更なる足がかりとして、甲斐の武田家へ主人公を嫁がせる事となった。

生娘でもなく未亡人の自分がそんなことは嫌だと言ったのが、聞き入れてもらえなかった。

二度目の初夜の晩、主人公は若かりし頃の親方様に全てを打ち明け、自害しようとした。

しかし、親方様はそれでも構わないと共に在る事を望んだ。

主人公の運がやっと良い方に向かったかに見えた。が、しかし！！

その時すでにお腹の中にはかつての婚約者の忘れ形見が！！

親方様も主人公も二人の子として育てようと誓うが、主人公の実家が疑惑を持ちはじめる。

あの手この手とちょっかいをかけてくる実家をかわしつつ、順調に命を育む主人公。

しかし、やはり運命の輪は主人公にやさしくなかった。

臨月となり、もう少しで産まれるといった頃、痺れを切らした実家が強行手段に出た。

そのせいで、主人公は深手を負い帰らぬ人となった。

不幸中の幸いかお腹の子供は無事であった。

その子供は藤と名づけられ親方様が縁のある寺に預けた。

主人公の実家には事故により母子共に死亡と報告した。

時を同じくして主人公の実家は下克上にあい、城も領地も失い縁者を頼ってどこぞに離散したらしい。

因果は巡り、いつか己に返ってくるもの。

・・・長っ。なんかこれだけで話しかけそうなくらい長い。

ジジイの話の大体を端折って見たけどそれでも長いね！！

その主人公が命がけで産み落とした子ってのが私の母親、お藤の方だそうです。

でもさ、それでどうして『血』が貴重って話になるの？

没落大名なんて、この戦国時代珍しくもなんとも無いでしょうに。

・・・ああ、まだ語るんだ。

今度は『血』に纏わる話しな訳ですか。

でも、一回休憩入れませんか？

・・・聞けよ、ジジイ・・・

ジジイの昔話は長かった。その２

ジジイの話が長いので、勝手に夕飯食べてます。ジジイは勝手にしゃべってます。

あるところに超人的な能力を持った一族がいました。・・・当時はさほど珍しくもなかったらしいですが。

その血脈はその力の恩恵を受ける者達によって受け継がれていました。

何の因果か坂上（さかのうえ）の何とかさんが先祖帰りし、当時は薄れてしまっていた力が蘇りました。

その原因が血の濃さである事を知った彼等は先祖帰り達を作るための一族を作りました。

彼等が自分達を脅かさないように武士（もののふ）という下位において。

それから遥か時を越えて、すったもんだの末に”その血”を受け継いでしまった私がいるということらしいです。

・・・かなり端折ました。

だって、源氏と平家の戦いがどうのとか、足利氏がどうのとか、・・・言われてもね。

まだ話したりないみたいですが、お子様は寝る時間です。おやすみなさい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0036r/

藤丸地獄変　異聞譚

2011年10月6日13時02分発行